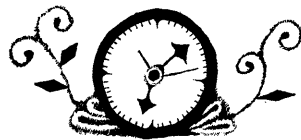


子ども時代と私(4)

満州開拓団の引揚者の子

黒岩 卓夫



私の家族と開拓団

私は一九三七年生れの「子ども戦中派」である。小学校二年の夏、日本は戦争に敗れた。私の小学校は、「長興青葉在満国民学校」^{チヨウキョウコウ}という一寸変わった名称である。在満とあるように満

州（現中国東北部）の開拓団の日本人学校である。生徒の数は全体で一〇〇人程度だった。

私の家族は父母、兄（小五）、妹（六歳）、弟（四歳）との六人で、姉は二人いたが長姉は朝鮮に嫁いでいたし、次姉は女学校在学中で日本に残っていた。

私の父は農民として渡満したわけではなかったが、父は信州の農家の次男であった。母を五歳で亡くしたがその母が遺言で二一（父の名前）を医者にしたと言つて死んだといわれている。そのためか父は小学校卒の身でありながら医者になる道を求めつづけた。

その願いは満州開拓団だけに通用する医者（正式には保険指導員）になる形で実現した。確かに開拓団での父は、子どもの私の目にはまぎれもない医者として映った。

白衣を着て聴診器をもって患者をみていたからである。

しかしながらこうした父の夢はわずか三年で水泡に帰した。

昭和十七年に単身赴任し、財産を処分して翌十八年に家族をよ

びよせたが、敗戦によって満州帝国が崩壊するにいたつて、満州侵略の尖兵でもあった満蒙開拓事業の、その一端を担った父の「医者」という資格は、水泡のごとく消えてしまった。

父はなつかしい故郷に戻った時、またふつうの人に戻ったのである。

私たちは昭和十八年七月、現黒龍江省の勃利市から十里ほど奥まった「佐渡開拓団」に落ち付いた。その後隣接する鹿島台、耕野開拓団（宮城県）に移つて敗戦を迎えた。いや正確には二十年八月九日午前〇時、ソ連参戦の日までこの開拓団の小さな病院に住んでいたのである。

八月九日の夜、私たちの逃避行がはじまった。

そして翌二十一年十二月末に日本に引揚げ、私の日本での生活が再開された。そこは、長野県北安曇郡美麻村大字高地小字屋敷平という三軒の小部落であった。そこは父の生家であったから私に



とっては伯父さんの家に一家がころがりこんだのである。まさに引揚者というやっかい者になっていた。

私は美麻南小学校の高地分校（三年生まで）の三年生の三学期に編入された。四年生からは本校に行き、そのまま美麻南中学校に進学した。

悲しみは喪なわれるのだろうか

急激に訪れたパニック、ぬきさしならぬ危機は子どもにとっては何だったのだろうか。

開拓団はソ満国境からわずか七十キロメートルの位置にあった。ソ連参戦のその日の夕方から、すでに東方の夜空には、ソ連軍の砲火の閃光がせまっていた。徒歩、無蓋車、空襲、野宿、伝染病、飢餓、満州人の反乱、ソ連軍の略奪の中、私の弟は九月、妹は十月に死亡した。

父は団の責任者として家族とは全く別行動をとっていた。従って母は四人の子を連れて持てるだけの物を持つての逃避行であった。

弟は他人の背中におぶわれたまま、「ミズ、ミズ」と叫びながら死んだ。

妹は収容所で、「リンゴを食べたい」と言いながら飢え死んだ。

私はまだその頃は元気だった。収容所はハルピンの桃山小学校だった。私は毎朝、トラックに死体が山積みされて、どこかへ運ばれて行くのを黙って眺めていた。十月九日の朝は妹の小さな亡骸もその中に入った。

妹はとても可愛い女の子だった。その妹が骨と皮となり、背中や腰に床ずれをつくり、生きながら体の一部が腐っていく中で、いたいいたいと泣いていた。

後で知ったことだが、この頃は母も神経に異常

をきたしており、物を考えることができず、目もよく見えないような状態となっていた。おまけに父は発疹チフスにかかり、どこに生きているのかも不明となっていた。

私はこの弟や妹の死をどう受け止めたかよくわからない。今は思い出して涙を流すが、当時は悲しんだという記憶がない。ましてや泣いたという記憶もない。たくさんの死体がトラックで運ばれる光景も、単に事実として記憶しているだけだ。私が非情だったのか、感情を忘れていたのか、子どもってそんなものなのか自分では判断ができない。このことはずっと私の心に異物としてありつづけている。

私自身はその後発疹チフスにかかり生死の境をさまよいつながり延命し、記憶が再び復活するのは十一月の半ばを過ぎてからであった。

学校がなくなったこと

ハルピンの街角にたむろしている「少年団」の一員に私は兄と共に加わっていた。少年たちはめいめにズタブクロをぶらさげていた。街路はゆるやかな坂道となっており、大型トラックが時々黒煙をあげて坂を登っていった。

その積荷の多くは石炭や薪の燃料だった。実はたむろする少年たちはこの燃料をねらっていた。

一台のトラックが石炭を積んでやってきた。上り坂にかかるトラックをねらってワトーと少年たちが追いかけた。坂半ばでトラックのスピードが落ちる。そこで荷台の後にしがみつこうようにして石炭の塊を奪うのである。うまくいけば大人の顔の大きさもある石炭の塊を荷台から落とす。落ちた石炭はパッと碎けて街路に飛び散る。それを低学年の少年たちが我先にと拾いズタブクロにつめる

のだ。

これは親を助ける大事な仕事であったが、同時にスリルのある遊びであった。

私は小学校から大学まで十八年間学校生活を送った。しかし考えてみるとこの満州での逃亡期間、約一年四か月は学校へ行かなかった。行きたくても学校がなかったわけだが、自分としては貴重な経験だったと思う。

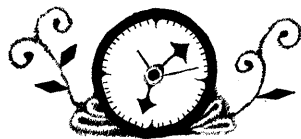
現在は学校があっても行けない不登校児が大問題になっている。それと逆の関係の中で子どもたちは、いや自分はどう生活してきたのか改めて回想してみるのも面白いのではないだろうか。

記憶をたどるわけだから正確ではないが、学校へ行きたいと思わなかったというよりもやらねばならないことがたくさんあって、激変した環境に適應することに子どもながら全神経を集中していたのだと思う。

食べるということが大人にとっても子どもにとっても最大のテーマであったから、食べるために生きているような観念にとらわれてしまう。

石炭や薪を奪うこと、時にはマーケットから盗むこと、有用なものは何でも拾うこと、野草でも食べられるものは徹底的にとってくるのが習慣になった。街角や空地に生えているタンポポ、オバコはごちそうだった。

一日に一度はゴミ捨て場に行つて物をあさつた。こうしたことは修身に反することであったが、あつという間に新しい倫理観まで身につけてしまう。これが新しい「学校」でもあった。



もつとまじなこともやった。母と一緒に物売りに繁華街にでかけて行き、街角でせっけん売りをやった。ハルピンの冬は寒い。ここえる手足に耐えながら声を出して買って下さいと呼びかける。おそらく母一人よりも小さな子を連れての方が同情心をかけて売れ行きがよいとの思惑があったのだろう。しかしさっぱり売れなかった。それだけにたまたま買ってもらう時のうれしさは忘れられない。

いや本当の勉強もしたのだ。

アパートの前住人が物置に捨てていった本を見つけたことである。少年向けの雑誌があった。開拓団では見たこともないものであったから、むさぼるように読んだ。そのうれしさは強烈なものだった。



また、たまたま少年向けの細菌学の単行本があった。これは完璧に暗記するほど読みこんだ。このときビールスとかリケッチアという微生物を覚えた。今でも頭脳に残っている。

また隣にブラブラしていたおじさんがローマ字を教えてくれた。これもすぐマスターした。ロシヤ語や中国語も片言は覚えることもできた。まさに好奇心さえあれば、全てが学校になったのである。

自分がおとなになる恐怖

モラトリウムという言葉が一時流行した。なかおとなになりたがらない青年のことをさしている。

私は戦後の日本の農村で、土地も家もなく、親に職業がない中学生のころ、とりわけ三年生とし

て自分の将来をきめねばならないころ、自分はど
うしたら食べて行けるのか、何か職に就けるのだ
ろうかという恐怖感にも似た不安におびえてい
た。

高校へ進学するかどうかも大問題だった。この
ころ何かの書類の父の職業欄に「無職」と記入し
たときの無力感も忘れられない。私が高校二年ま
では父は無職だった。

たとえ無職の親の元でもなんとか元気に生きて
いることが無上に幸福にさえ思えるという身分で
もあった。おそらく心理学的には社会的に力のな
い父、貧乏な家が子どもに不安感を与えていると
同時に、親に頼れないということが、一種の神経
症にさせていたと思う。

高校は当時近くの町の病院で看護婦をしていた
姉の援助によってなんとか進学することができ
た。しかしこの神経症から抜け出るのは、大学に

合格した時だったと思う。その時はじめて自分は
なんとか自分の力で生きて行けるぞと思ったので
ある。

長興青葉在滿国民学校約一〇〇人の生徒のうち
十五人が生きて帰国した。その第一回同窓会が三
年前にもたれ、私の担任だった女の先生も参加し
た。戦後五十年目の再会であった。そして今年の
九月には、同窓会でその開拓の地を訪れることにな
った。追憶と追悼の旅である。戦後は終ってい
ない。このことを改めて訴えたい。

(新潟県浦佐萌気園診療所医師
もえぎえん)

参考書 『医者之父から七人の子どもたちに言いたい

こと』黒岩卓夫 教育史料出版会